



FACULTY OF LETTERS

# 文学部生のリアルな！ 字生生活

Vol. 63

13専攻・1プログラムから成る文学部の充実したキャンパスライフと、  
文学部ならではの多様な学びの情報を発信します。

どうして英語を学ぶのかー私は高校生  
のころ、英文法の整然としたロジック  
に魅了され、大学では英文専攻を選  
びました。当初は英文法の勉強で満足  
していました。しかし、文学部で海外  
の学生との交流活動や海外での研究発  
表を経験し、人生で初めて海外を訪れ  
たことが、その考え方を大きく変えま  
した。英語そのものの学習を目的とす  
るのではなく、他者とかかわり、専門  
的な議論を行うための手段として英語



## 英語学習の方向性

文学部人文社会科学英語文学文化専攻4年  
私立茨城高等学校(茨城県)出身

田谷 拓巳

を用いることに、英語学習の価値があ  
ると考えるようになりました。

### 試験・資格としての 英語学習の限界

英語の学習は、大学受験や学校のテ  
スト、英検など、試験や資格を目標と  
する形で行われることが多くあります。  
これらは英語力が数値として客観的に  
示されるため、学習目標を設定しやす  
いという利点があります。一方で、こうし  
た試験を中心とした英語学習には、見  
落とされがちな限界もあると思います。

私自身、2025年11月に英検1級  
を取得しました。大学1年生のうち  
取得しようと思った発起しましたが、内  
容の高度さから思うように学習が進ま  
ず、3年間にわたって不合格を経験し  
ました。英検は英語に必要な4技能「読  
む・聞く・書く・話す」のすべてが高い  
水準で求められます。当初は資格を取  
得すれば、日常の英会話や議論への参  
加、さらには英文執筆など、どのよう

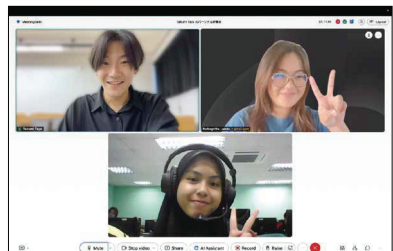
な場面でも英語を不自由なく使  
えるようになるという理想を抱  
いていました。しかし、実際に  
資格を取得した後でも、英語を  
使用する場面で戸惑うことは少なくあ  
りませんでした。そこで気づかされたの  
は、試験で測られる英語力と、実際に  
英語を運用する力との間には乖離があ  
るという事実です。この理想と現実の  
ギャップから、試験に合格することだけ  
を目的とした英語学習には、ある種の  
限界を感じざるを得ませんでした。

### 文学部で経験した 実践的な英語運用力

試験勉強で身につけた英語力を土台  
として、実際に英語を使用する機会と  
なったのが、文学部で経験したグロー  
バル・スタディーズの活動でした。こ  
の活動では、オンラインのビデオ通話  
を用いて、マレーシアやタイの学生と  
少人数のグループを作り、お互いの文  
化について英語で紹介し合いました。



マレーシア工科大学



オンライン交流

そして、スタートから数カ月後には実  
際にマレーシア工科大学を訪問し、学  
生と交流活動を行いました。

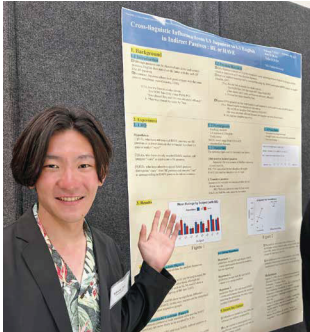
オンラインでの交流で、初めて海外  
の年齢の近い学生と会話をしたときは  
衝撃を受けました。お互い英語を第2  
言語として学んでいるのにもかかわらず  
、交流した学生たちは流暢に話して  
いたのです。初回の会話ではシヨック  
を受けましたが、回数を重ねることに  
周りに倣ってミスを気にしないという  
マインドで臨むようになりました。その  
結果、たとえば「そこ、行ってみよう」と  
言うのに、平気で「I am like to go  
[care]」といった文を誤って発話するこ  
ともありました。もしかしたら、聞き  
手には不自然に聞こえたかもしれませ  
ん。しかし、細かい文法に気を配るこ  
とをやめてから、明らかに会話が弾む

ようになりまして。お互いの国の文化について紹介している中でも、食文化の違いやアニメ・漫画について話が盛り上がり、自然な対話が生まれました。こうした経験から、英語を正しく使うことだけでなく、相手に伝えるために使うという姿勢こそが、異なる背景を持つ人々と関係を築くための実践的な英語運用力へとつながると実感しました。

### 英語を使い、自分の専門的価値を高める

国際的に活躍するためには、コミュニケーション能力に加え、自分の専門分野について英語で議論できるだけの専門性も必要だと思います。そのきっかけとなったのが、ハワイ大学マノア校で開催された言語学の研究発表会への参加でした。

これが私にとって、初めての学会発表の経験でした。私は日本語と英語の言語的な違いが引き起こす日本人の英語学習における誤りをテーマとして扱いました。この発表にあたり、日本語を知らない外国人が理解できるように、日本語の言語的な特徴を英語で説明する必要がありました。さらに、発



ハワイ研究発表



O'Grady 先生

表後の質疑応答では、言語学研究の最前線をゆくハワイ大学の先生からの質問に十分対応できない場面がありました。日常会話としての英語運用には支障はなかったものの、学術的な議論に必要な英語力が不足していることをそのとき痛感しました。

しかし、今後言語学研究を進めるうえで、英語の学びは必要不可欠です。言語学研究の共通言語は英語であり、研究発表や論文執筆の多くは英語で行われます。海外で自分の研究を発表できる機会が増えれば、それだけ多くの研究者と議論することが可能になります。そのためには、専門的な内容について英語で議論できる力を身につけることが求められます。

日本の学会とは異なる環境に身を置いたことで、緻密な議論をするための専門的な英語の必要性を強く感じました。

### これからの英語学習

今後は文学部で経験した英語学習、実践的な国際交流、そして専門分野における英語使用を、すべて有機的に結

びつけていきたいと考えています。日本国内でただ「英語ができる人」に留まるのではなく、実践的な英語使用を通して、専門的な価値を生み出せる人として国際社会に関わることを。それが英語学習の進むべき方向を示していると考えます。

来年春からは、中央大学大学院文学

研究科に進学予定です。言語学の中でも第二言語習得研究を専攻し、日本人が英語学習で直面する困難の原因についての研究に邁進していきます。さらに、大学院在学中には長期留学をするという目標があります。この目標達成に向けて、これまでの経験を踏まえた新しい英語学習に取り組んでいきます。

### 文学部だより

## 東洋史学の学びを支える場として

すえなが ゆみ たかの みな  
末永 由美 高野 美奈  
東洋史学共同研究室

東洋史とはどの地域の歴史を指すのですか？大学見学に来られた方からよく寄せられる質問です。東洋史の「東洋」という言葉は中国、朝鮮などの東アジアを想起させますが、実際は東アジアから東南アジア、南アジア、中央ユーラシア、イスラーム以降の中東・北アフリカを含む広大な地域を指し、その歴史を扱う学問が東洋史学です。

中央大学東洋史学専攻では、東から西へと広がる、それぞれに異なる言語や個性豊かな文化をもつ研究領域を5名の専任教員と多数の兼任教員とでカバーし、各地域・時代史からアラビア語やインドネシア語などの語学をはじめ、さまざまな授業を開講しています。

学生は各地域の歴史を学び、情報収集などの基礎的リテラシー、史料読解力や語学力を身につけ、それまでに学んだことの集大成として卒業論文を執筆します。そうした4年間の学習・研究を支える場としてあるのが東洋史学共同研究室です。

東洋史学共同研究室は閲覧室・書庫・演習室で構成され、東洋史学に関する資料を5万冊近く所蔵しています。事典類、入門書から専門的な研究書、学術雑誌、原典史料を揃え、自由に利用できます。学生は興味のある図書を読んだり、授業の予習や演習のレジュメ作成、卒論・課題作成のための資料収集など日常的に研究室を利用し、卒論提出間近の時期には、進捗を学生同士で話し合い、集めた資料を積み上げて黙々と作業したりする姿が見られます。

歴史を学ぶ、研究するということは容易なことではありません。時代をさかのぼるほど残された情報は限られ、また大量の資料を読み込んで得られるのは論文のほんの1行分といったことすらあります。苦しい作業ですが、年号と歴史事実を暗記するだけではない、今につながる歴史を実感できるのではないのでしょうか。学生たちの多様な関心や好奇心を生かす場として、これからも研究室を存分に活用してほしいと思っています。



研究室で自習する学生たち